

ジェームズ・A・レイリー著

『シリアのある小都市：

オスマン時代18—19世紀のハマー』

三 浦 徹

ハマーは、シリアの内陸部、ダマスクスとアレppoの間にある中規模の都市で、オロンテス川にかかる巨大な揚水車で名高い。著者が、決して知名度の不高くないこの「小さな」都市を採り上げた目的はどこにあるのだろうか？序章では、二つの関心が述べられている。第一に、19世紀の世界大の変化が個々の地域にどのような影響を与えたのか、第二に、地域社会のもっている複合性を内側から描くことである。著者の関心は、地域の内在的な視点とグローバルな視点を重ね合わせることにあり、前者を社会史的、後者を世界システム的ということもできるだろう。著者は、「いかに社会は機能し、人々が生きたか」を探る中東の社会史研究は、A・レイモン、A・K・ラーフェクによって切り拓かれ、現在では、特定の街区に焦点を絞った研究へと発展しているとする。しかし後者のミクロな研究が見落としがちな、グローバルな経済環境や歴史的変化にも切り込もうというところに、著者の意気込みがあるといえる<sup>(1)</sup>。

ハマーを研究対象にする意義はどこにあるのだろうか。著者はこれについて、「オスマン朝時代のシリアは制度、法、社会学のいずれもが複合的で、一続きの混成的な関係が地方、地域、帝国の諸勢力のあいだを走っている」(p.14) こと、そして、このような地域性にも関わらず、従来の研究はもっぱら内陸のダマスクス、アレppo、エルサレムといった中心都市や海港都市のペイルートに集中していたことを指摘し、ハマー研究が、これらと異なるシリア都市の像を提供すること、それによって、過度な一般化ではなく、多様なシリア都市像の追究が目指されている。また、時代としては、18世紀にオスマン帝国の枠内での安定と地域的发展が進むなかで、19世紀のヨーロッパ経済との接合が諸都市に異なった影響を与え、これが20世紀の出発点となったことが意識されている。

著者は、カナダのトロント大学中近東文明学科の助教授で、オスマン時代のシリア史を専門とする気鋭の研究者である。これまでは、ダマスクス歴史文書館に所蔵されるイスラム法廷文書(台帳と証書)をもちいて、ダマスク

スの都市・周域の社会経済に関する論文を発表してきた。本書は、同様のイスラム法廷文書に加えて英・仏の領事報告を資料に、著者が新しい対象であるハマーに挑んだ書き下ろしの著作である。

本書の構成は次のとおりである。

1. 序章
2. 家族とその価値
3. 社会的ネットワーク
4. 住民、交易、手工業
5. 土地、農村の資源、貸付
6. 農村―都市のネットワーク、土地資産、世界経済
7. 結論

付表・文献抄、索引（本書では、原綴は固有名詞も用語も付加記号をもちないで表記されており、本原稿でもこれにしたがった）。

序章では、すでに紹介した本書のねらい・資料・方法を述べたのち、ハマーの歴史を概観する。オスマン朝下では、当初はトリポリ州に、1724/25年以降はダマスクス州に帰属し、アガまたはベイの称号をもつ軍人の総督 *muta-sallim* が治安（政治）と徴税の責任を負った。

2章から6章までが本論である。章題が示すように、社会集団とそのネットワークに着目するアプローチをとる。そこでは、「イスラム都市」を閉鎖的な社会集団のモザイクとして描いたオリエンタリストのモデル（Gibb & Bowen, 1950）を批判し、オスマン朝時代のシリアを、水平的・垂直的な社会関係の交錯する場として捉えたアブデルヌール（Antoine Abdel Nour, 1982）の手法に賛同する。ラビダスの「ネットワーク・モデル」については、初期の著作にはモザイク社会論的色彩がみられたが、1989年の「イスラムの都市性」東京国際会議での定義（「目に見えない互酬的關係がばらばらな住民や家族を結びつける」）を、アブデルヌールのスタンスに接近したと評価する<sup>(2)</sup>。レイリー自身は、「家族を中心とした有力者が社会的ネットワーク（街区、職業、宗派）を通じて行使する力」（p.54）こそ、アラブや中東の都市社会の鍵として着目する。2－3章は、アクターとしての有力者とネットワークを抽出し、4－6章において、その経済活動を追跡する。

第2章では、都市の政治権力の仲介・調停者としてハマーの有力名家が紹介される。このような役割を果たす名家を、エリートと名士 *notable* にわけ、前者は国家との協力／対抗関係にある軍人層、後者は、文化的資源に依拠する学者・宗教層とする。ハマーでは、前者を代表するのがアズム家、後者を代表するのがカイラーニー家とアルワーニー家である。

カイラーニー家は、ハマーを代表するアシュラーフ（預言者ムハンマドの

系譜)であり、17世紀にイブラーヒームが、オロンテス川右岸にモスクを建設して以来、同家の豪壮な邸宅が隣接して建てられ、この Hadir 街区が、同家の拠点となった。同家は、カーディリー教団のリーダーであるとともに、ハナフィー派に所属し、18世紀末以降は、アシュラーフの長(ナキーブ)職を握るとともに、ムフティーや裁判官代理(ハマー法廷の裁判官)に就くものも現れた。アルワーニー家は、16世紀初頭にオロンテス川左岸のアライラ街区にモスクとシャーズィリー教団の修道場を建設し、その子孫は同地区に居住し続け、モスクと修道場の管理を司った。同家は、シャーフイー派に帰属したが、18世紀後半以降は、ハナフィー派のムフティーとしても登場した。シャラービー家とハウラーニー家もアシュラーフに属し、前者はサーディー教団の、後者はリファイー教団のスーフィーで、教団の修道場を建設した。ナキーブやムフティーなどの職に就くことはなかったが、それぞれの街区や教団との結びつきを強め、18世紀には、街区の住民を代表して、オスマン側と徴税などの交渉にあたったことが法廷台帳に記録されている(p.30)。

軍人エリートであるアズム家は、アスアド(d.1757)の時代にハマーの総督となり、兄弟のイブラーヒームはトリポリ総督となった。アスアドは、ダマスクス総督に転任して以降も、食糧や絹の供給地としてのハマーとの関係を維持した。このほか、バラズィー、ダイフル、ジジャクリーなどのクルド系やトルコマン系の軍人層も、19世紀以降に台頭し、農地を手にしていった。

これらの名家の経済的基盤となったのが、ワクフ財である。例えば、‘Abd al-Qadir al-Kaylani は、ハマーの商店、果樹園、カフェ、工場、粉ひき場、公衆浴場、邸宅や住宅などのほか、ダマスクス近郊の農地についても、ワクフ財の寄進が記録されている。名士層がつねに一族の家産の維持増大をはかったのに対して、軍人エリート層は、スルタンの「僕」として、死後あるいは解任後に財産没収(ムサーダラ)を受ける危険にさらされていた。前述したアズム家のアスアドが1732年にハマー総督を解任されたときの商店街や果樹園などからの収入は2462ピアストルを数え(当時のハマーの家屋の平均売買価格は86.6ピアストル)、ファリス・ベイの1794年の資産は8000ピアストルに達した(当時の家屋の平均価格は309.67ピアストル)。

軍人エリートと名士は、一方で族内婚によって基盤を強化しつつ、他方でアズム家とカイラーニー家の婚姻のような族外婚によって連携を強めた。これらの家は、拡大家族が同居できる巨大な邸宅を構え、家内奴隷や解放奴隷を含む家集団が形成された。女性についてみると、軍人エリート層の女性の財産の記録は稀であるのに対し、名士層の女性の財産取引や寄進は頻繁に見られる。著者はこの差を、女性の財産・経済活動の顕著なダマスクスやトリ

ポリ、不活発なナールスと比較し、前者は土地私有権のような安定的な財産形成がなされたのに対し、後者のような競争的環境では女性の経済活動が難しかったとの仮説的説明を提示したうえで、ハマーに関しては、軍人エリート層の経済基盤は徴税請負であり、名士層はオロンテス川沿いの果樹園を握っていたこと、これが女性の経済参加の度合いの違いとなって現れたとする。このような仮説の妥当性は、さらに検証されるべきとしても、法廷文書から得られる情報を比較検討することで、諸地域の社会経済の質の違いを導き出す手法は注目される。

中・下層の家族には、上層の名家とは違った家族関係がみられる。都市の下層家族は居住する家屋（ないしは居室）を所有するのがせいぜいであり、また、男性が不動産所有を常とするのに対し、死亡時に不動産をもたない女性は珍しくない。他方で、女性が相続や売買によって不動産を得ることもあり、同族内での不動産をめぐる争いもみられる。全体的にみて、居住不動産はふつうの人々にとって貴重な資産であった。また、ハマー市民は、親族関係にない他人と隣り合せて手狭な街区にすむのが通常で、配偶者の早逝によって、家族関係自体はたやすく変化した。単婚が一般的で、複数の妻をもつのは限られていた。これらからも、父系中心の家族モデルは、中下層には適用しがたいといえる。とはいえ、親族内での金融や協業はひろく見られ、家族の絆は、生きていくうえで肝要だった。女性は、男性主導の家族構成のなかで、従属的な役割にあったとはいえ、親族などから不当な扱いを受けたときには、法廷に提訴した。とくに19世紀後半以降にイスラム法廷への提訴が顕著となり、公的な場での解決が求められていたことを示している。

社会的ネットワークと題される第3章で扱われるのは、街区、同業組合、コミュニティとこれらに対する有力名家の関係である。まず、街区 mahalla については、18世紀と20世紀の街区のリストをあげ、ハマーは約20の街区からなるが、街区の名称や区域は固定的ではなく、フレキシブルであったことを示す。街区の内部構造については、シャイフとよばれる長が住民を代表したほか、さまざまなレベルの有力者を、法廷台帳から抽出する。とりわけ興味深いのは、居住財産を購入した者が、土地の賃貸料 hikr を街区の有力者 ahl, ikhtiyariyya に納めるように定められていることである (p.56)。住民にとって、同一の宗教や部族の意識が、街区のアイデンティティとなることはあったが、著者は、「宗派的、部族的、エスニックなアイデンティティは、単に実在の血の絆や架空のそれである以上に、…複合的な社会のなかで、人々の役割規定を補助する実践的な指標である」(p.60) という立場をとり、ハマーの織りなす社会的ネットワークを「タペストリー（絨毯）」という喩えで表現する。

有力名家は、これらのネットワーク、とりわけ同業組合に対して太い関係を保った。第一に、総督府は、同業組合にとって最大の顧客であった。軍人エリートは同業組合に貸付を行い、名士、とりわけアシュラーフは、職人たちに債務の保証人などの形で支援をした。軍人エリートは、さらに交易商人を保護しつつ交易にも関与し、農村部では、徴税者として、公的にも私的にも穀物の流通を握った。彼らは、不正な徴収に走ることもあったが、カイラーニー家などの名士層は、これをとどめる役割を果たした。名士層は、ワクフ財の監督権を通じて、商業・農業資産への影響力を強めた。多様な社会的ネットワークは、決して排外的なものではなく、エリートにせよ名士にせよ、各種の社会的ネットワークを通じて表現される複合的で連結的な利害関係をもっていた。カイラーニー家のシャイフを例にとれば、スーフィーのリーダーであり、裁判官であり、ワクフの管理者であり、街区の名士であり、地主であった。

4－6章では、諸社会層の経済への関与の諸相が検討されるとともに、18世紀から20世紀への経済社会の変化に注意が向けられる。まず、オスマン帝国の巨大な版図に含まれることで、ハマーは、周域の農業生産に依拠しつつ中継都市として発展をとげる。19世紀の人口は約3万から6万に増大し、18世紀には14の隊商宿、43の同業組合を数えた。業種では、銃をはじめとする金属、食品、織物が挙げられる。興味深いのは、法廷台帳から、同業組合の活動が具体的に描かれている点である。たとえば、1728年にパン屋は良質の小麦だけを使い、貧者の需要にも配慮すること、これに違反したときは体罰に服することを誓った (p.78)。1732年には、同業組合と街区の代表が総督に対して税の免除を訴えた。織物業は、700の機、4900の織工をかぞえ、これは市人口の1/12に相当した。主たる製品は、綿と絹で、毛織物はヨーロッパに輸出された。女性は主として糸紡ぎに従事した。アレppoやダマスクスとの違いは、営業権 *gedik* の記載がないことで、これは商店の所有権と営業権が分離されていなかったためと理解する。ここでも、特定の地域に閉じこもらずに幅広く資料を渉猟する著者の経験が生かされている。交易については、ハマーはメッカ巡礼のルートに位置し、ヴェネチア商人などヨーロッパ商人との取引関係もみられた。しかし、しだいに周囲の農村域との関係を強化し、大土地所有の中心地へと発展する。

第5章では、20世紀初頭のあたり一面のトゥモロコシ畑という景観から、都市の不在地主の土地支配が確立されていたことを示し、その起源は18世紀に遡ることを説く。都市の軍人エリートや名士層による周域の支配は、さまざまな道をとって進行したが、徴税請負（イルティザーム、とりわけマリーリ・キヤーネとよばれる終身請負）に拠るところが大きく、アガやベイなどの軍

人官職保有者が、行政管轄域の徴税請負権を握った。また、カイラーニー家などの名士層も進出し、ヌサイリー教徒やトルコマンの長に委譲されることもあった。第二の方法は金融であり、アガも名士もあるいはキリスト教徒も、農民に対して貸付を行い、その回収にはイスラム法廷が用いられた。法廷が債権者の要求を拒むこともあったが、村民は借金によって分益小作者の地位へと転落していった。第三は、土地を家族ワクフとし、賃貸耕作（小作）にだす方法である。しかし19世紀中葉になるとハマールの法廷台帳から農地のワクフの例が失せ、同時期のダマスクスでの頻出と好対照をなす。その理由として、著者は、スルタンによるワクフが少なかったこと、そして、ワクフ地が私有地化していた可能性を示唆する。実際に、ミルクの用語で呼ばれる私有地は、都市の軍人エリートや名士層の手にあり、賃貸耕作に出されていた。このような都市—農村関係のもとで、法廷の果たす役割は、もっぱら都市の地主側の権利（収穫や債権）の擁護のために用いられ、一般の村人が自身の権利擁護のために出廷することは稀であった。このような不在地主の農村支配に、ヌサイリー教徒やキリスト教徒の地主といった宗派関係がオーバーラップした。

第6章では、シリアの資本主義世界経済への編入による、都市—農村関係の変化が検討される。都市民の周域支配は、協業関係や金融などさまざまな形で展開した。オスマン帝国のもとで、ハマールは、穀物、石鹼用ソーダ、綿花などを輸出していたが、手工業では、ヨーロッパ工業製品の進出によって高級品の市場を奪われ、もっぱら中・下級の商品市場を対象とせざるをえなくなり、女性の糸紡ぎが失業した。しかし、ダマスクスやベイルートのように、キリスト教徒とムスリムの宗派による社会的分業が生じることはなく、マロン派キリスト教徒の領事とて、さまざまな市民と経済関係を結び、キリスト教徒やフランス人同胞の利害のみで行動することはなかった。

第7章では、ハマールの政治・経済構造とその変化をまとめる。階層的な社会・法秩序を原理とするオスマン支配の傘のもとで、軍人エリートと名士層は、ビジネスと政治の両面で協力関係を築き、ハマールの富と権威の構造を確立した。両者は、周域の村民やベドウィンと経済関係を強め、「保守と土地領主の牙城」ともみられる強固な政治的・経済的支配を築いたが、これが、グローバル化のもとでの、ハマールの近代化の姿であった。隣接するホムスがアラブ改革運動の影響をうけたのに対し、ハマールは後衛に位置したが、その原因は、18世紀以来のハマールの社会経済に起因することになる。ここで著者の関心が、20世紀の現代シリアと結びついていることが明らかとなる。

本書の特徴として、つぎの3点を指摘することができる。第一は、法廷文書の有効性である。いわゆる叙述史料がほとんど残されていないハマールにつ

いて、法廷台帳から、有力者（名家）を中心とした経済活動、経済関係を再構成したことである。そこでは、同時期のダマスクスなどと比較することによって、文書記録に記載されていないこと（エリート女性の財産所有や19世紀の農地ワクフの不在）からも「意味」を引き出すことに成功している。また、免税や官吏の不正の訴えなどの記述は、ダマスクスやアレppoでは *aw amir* とよばれる勅令集に主に記されているが、ハマーの法廷台帳は、イスラム法廷での審理事項（民事）だけでなく、中央政府との通信をあわせて記帳していたことを示している。

第二は、社会的ネットワーク論を、ラビダスのそれよりも、モデルとしてより明確に、より豊富な事実をもって発展させたことである。ラビダスの中世シリアの都市社会研究では立ち入ることができなかった街区や同業組合の内部構造や社会経済関係を描くことができたのは、法廷台帳という文書史料とこれを丹念に探索した著者の力量によるだろう。また、ラビダスやアブデルヌールが、ネットワークの多様性や複合性を言うだけであったのに対し、レイリーは、家族集団を核にすえ、有力者とネットワークの関係を追跡する。また、ラビダスのネットワークというメタファーに替えて、タペストリーのメタファーを提示するが、ネットワークという語がややもすれば透明で無機的印象を与えるのに対して、縦糸と横糸とこれに絡ませたパイルによって社会の様相が異なることが暗示される点でも、議論を一步進めている。

しかし、軍人エリートと（文民）名士による共同支配という結論は、マムルーク軍人とウラマーによる共同統治というラビダスの中世社会論と大きな差はないようにみえる。レイリーは、19世紀のグローバル経済に両者が巧みに対応して支配を強化したことを指摘するが、じつは、軍人と宗教知識人という勢力は、中世以来、時代に対応して生き延びる力をもっていたのかもしれない。

第三は、ハマーを「都市的なシリアのミクロコスモス」と位置づけ、ハマーからシリア全体の変化を読みとりながらも、ダマスクス、アレppo、バイルートなどとの微妙な違いを提示し、多面的なシリア都市像の提示に成功していることである。

最後に、日本の研究者との交流の影響を指摘しておきたい。レイリー氏は、1995年にモンテリオールで開催された世界歴史学会議において、佐藤次高氏が組織したパネル（Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks）において、18世紀のハマーについての報告を行った。ここで、ラビダスのネットワーク論の適用性を論議し、タペストリーの比喩を提示している。氏が、このパネル以前からラビダスの所論に関心をもっていたかどうかは分からないが、ネットワーク論とハマーの事例研

究を結びつけたのは、このモントリオール会議であったことは確かである<sup>(3)</sup>。また氏は、2000年の「イスラーム地域研究」の「比較史の可能性」ワークショップに来日し、ダマスカス、ハマー、シドンの3都市の比較をおこなった<sup>(4)</sup>。日本の学界もまた、中東研究というタペストリーの本の糸の役割とを果たしていることはまちがいない。

## 紹介

- (1) 法廷文書およびこれをもちいたシリア史研究については、三浦「オスマン朝時代のシリア史研究：A・K・ラーフェク氏の法廷文書研究を中心に」『お茶の水史学』第34号、1991年、同、書評「ブリジット・マリノ&大河原知樹編『ダマスカス歴史文書館所蔵オスマン時代法廷台帳目録』」『東洋学報』第82巻第2号、2000年、を参照。
- (2) ラビダスをはじめとする都市研究の動向については、羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究：歴史と展望』東京大学出版会、1991、pp.86-89、109-117を参照。
- (3) James A. Reilly, "Elites, Notables and Social Networks of Eighteenth-Century Hama", Tsugitaka Sato(ed.), *Islamic Urbanism in Human History*, London, 1997.
- (4) James A. Reilly, "Local and Regional Economies of Ottoman Syria during the Eighteenth and Nineteenth Centuries", Miura Toru ed., *Ownership, Contracts and Markets in China, Southeast Asia and Middle East: The Potentials of Comparative Study*, Islamic Area Studies Proceedings Series, No. 3, Tokyo, 2001.

James A. Reilly, *A Small Town in Syria: Ottoman Hama in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, Bern: Peter Lang, 2002, 154p.